

教育長 殿

宮城県古川黎明高等学校
校長 三宅 裕之 印

令和7年度学校評価報告書

1 本年度の重点目標

- (1)生徒が安心して学べる学校・学年・学級づくり
- (2)違いを認め尊重しあう社会性の育成及びいじめを生まない心の醸成
- (3)中高一貫の強みを生かし、生徒が主体となる学習活動、特別活動等の充実
- (4)コンピテンシーベースのカリキュラム構築とカリキュラムマップの開発・活用
- (5)探究推進プロジェクト及び授業づくりプロジェクトを活用した学習活動の推進
- (6)生きづらさを抱えた生徒への支援の充実
- (7)授業・特別活動と課外活動を関連付け、生徒の進路選択と希望進路の実現を支援

2 自己評価結果に対する学校関係者評価

A 達成している B おおよそ達成している C あまり達成していない D 達成していない

評価分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		自己評価結果	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学習指導	① 安定した授業進行の支援	B	授業時数の確保については、実施率の分析等を行い、時数確保を全体の課題として明確化し共有した。具体策として今年度はまず、授業カットから短縮授業への変更、第3学年は1、2月の実施時数の見直し等を行い実施率の向上ができた。今後も、行事の精選を進めながら、時数の確保と授業づくりの改善に取り組んでいきたい。	B	A
	② ICT機器を効果的に活用した個別最適な学びへの支援と課題を抱えた生徒への学習支援	B	授業評価については7月に実施し、夏休み明けに改善を図る流れを今後も継続していく。また、課題を抱えた生徒への対応については、同時双方向型遠隔授業の導入によって学校に戻れる生徒も出てきている。今後も対象生徒・保護者に対してのアプローチを学年や保健環境部等との連携を密にしながら、生徒が良い方向に進むための支援体制づくりを推進していきたい。	B	B
学校関係者評価委員会における意見	課題を抱える生徒への支援について適切に取り組まれており、効果が表れている点は高く評価できる。難しいと思うが、「良い方向に進んだか否か」を把握する方法があると良い。アンケートのみに頼らず、具体的な事例の蓄積や共有を通じて学習指導の効果がより見えると良い。				
生徒指導	① 生徒の決断力・実行力・自己肯定感の養成と支援	B	全生徒の一人一人が自治的な組織である「生徒会」の一員であるという意識を持つことができるように支援する体制を構築したい。よりよい学校生活を送るための組織を形成して、話し合い、互いの意見や経験を尊重し合えることができるように支援する。	B	B
	② 生徒の社会性や学校としての連帯感の育成と支援	B	全生徒が、異学年の枠を超えて互いに協力し、多様な人たちと関わる中で社会性を養わせ、体験的な活動である学校行事を主体的に、企画し、運営することができるように支援する。	B	B
学校関係者評価委員会における意見	生徒ひとりひとりに即すもので状況に応じて指導してもらえれば良いと思うが、改善策がやや抽象的に見えた。生徒の多くが自治的な活動に参加できる仕組み作りが必要と思う。多様な人達と関わらせ、社会性を育み、豊かな人生につながる支援を期待する。				
進路指導	① 進路目標の明確化に向けた中高各段階における適切な指導の推進	B	中学校・高校の教員同士による普段からのコミュニケーションを大切にし、中高の連携を密にし進路行事を充実させたい。中学生には高校教員からの進路講話を更に充実させ、中学生に対する早期進路指導を進めることで、高校や将来に対する興味関心を高めさせる。高校生には、発達段階や進路希望に合わせた進路ガイダンスを実施し、進路目標の明確化、進路意識の向上を促し、学習意欲につなげていく。	B	B
	② 適切な進路情報の提供	B	中学生、高校生、保護者、地域に本校の進路指導に関する情報を発信していく必要がある。進路通信『黎明キャリア通信』を月1回発行し、生徒の発達段階に合わせた情報や保護者が知りたい進路情報を発信していく。本校ホームページやeメッセージも活用し、本校の進路行事の内容を保護者や地域に発信していく。大学のみならず、専門学校、各種学校、就職志望者への有益な情報も提供していく。	B	A
学校関係者評価委員会における意見	多くの進路情報が提供され、進路選択に大きく役立っていると感じる。中高併設を活かした段階的な設計や多様な進路に対応できる体制が良い。理想を言えば、探究活動の中で将来の展望や進路が出てくると良いと思った。大学入試の変化に応じる改善策を多様と考え、指導の実施に生かしていく必要がある。学修した成果を実社会の現象に意欲的に結び付け、将来に生かす取り組みの開発を進める。				
SSH事業	① SSH事業を活用した校内研究体制の構築	B	「授業づくりプロジェクト」と「探究推進プロジェクト」を通じた研究開発に全校で取り組み、全職員が授業プランや探究活動の記録を共有することができた。今後も引き続き研究開発を継続しながら、指導実践や生徒の変容の記録等の成果物を蓄積・検証し、改善していきたい。また、階層的ループリックの検討など、成果物についての校内でのさらなる共有と外部への発信・成果普及に努めたい。	A	A
	② 地域に根ざした課題研究・併設型中高一貫校の特色を生かした探究活動の推進	B	中学3年生・高校1年生合同の「大崎耕土フィールドワーク」による異年齢集団での学び合いや、高校1年生の探究活動における内進性と外進生の編成による学び合いを通じて、併設型中高一貫校の特色を生かした探究活動が展開できた。高校生向けの探究力ループリックをもとにした中学生・小学生向けループリックの検討をすすめ、さらに一貫校としての特色化を進めたい。	A	A
学校関係者評価委員会における意見	高度な探究力を身につけさせる取組や地域に根ざした異年齢集団での学び合い、さらには海外も含めた他の高校生徒との交流や対外的な発表等、成果を発揮していると思う。探究等さらに強化されると良い。理想を言えば、探究活動の中で将来の展望や進路が出てくると良い。				

3 次年度の課題と改善方策

次年度の課題	改善方策
① 学習指導について	SSH事業の「授業づくりプロジェクト」でこの2年間取り組んできた、「気づき」→「問い」→「確かめ」という「黎明探究ループ」を核とした授業づくりと相互授業、公開授業研究会等の研修会は継続したい。さらに探究的な学び、中高一貫教育、学観点別評価、ICT教育などの班に分かれ、多角的な視点から組織的に研究ができる体制も整ってきているので、それらがより有機的に結び付くように整備していきたい。その上で、各授業と探究活動それぞれの実践・成果を結び付け「深い学び」を実現するための脂質・能力の養成に努め、授業アンケート等によりその成果を可視化した。また、課題を抱えた生徒への学習支援については、同時双方向型遠隔授業等による支援が奏功し、学校や教室に少しづつ戻ることができるようになったという事例も見られた。今年度の取組の総括を学校全体で共有し、次年度はさらに個々の生徒の状況に適した、スムーズで実効性のあるものにする。
② SSH事業について	「探究推進」「授業づくり」の2つのプロジェクトの取組によって、中学校・高校6年間のコンピテンシーベースのカリキュラム・マネジメント開発について組織的に取り組める体制ができた。次年度は、2つのプロジェクトのそれぞれで得た知見・成果を全体で共有しながら、相乗効果が高まるように研究を推進する。また、「大崎耕土課題研究」における中高合同フィールドワークなど、探究活動における個々の取組をさらに中高で系統性のあるものにしていきたい。近年、高校3年生における総合型選抜入試の面接・小論文などは、探究活動について触れる生徒が多く見られるようになったことも踏まえ、中高6年間の中で系統性をより意識しながら、本事業における様々な取組を推進する。
③ 生徒指導について	学校行事等においては、体育祭や文化祭などの実行委員会活動なども中高合同で行えるようになってきた。今後は、中高や学年を跨いだ形での行事・生徒会活動をさらに推進し、多様な社会、異年齢集団の中で個人の個性や差異を尊重し、協力・共生していく姿勢と能力の育成に努めたい。その上で、生徒自身が自主的かつ実践的に課題解決に取り組むことができるように教員側は支援する役割に協したい。生徒達が新たな感覚・視点で行事の企画・立案・運営に取り組むことで、自主性と社会性、チャレンジ精神を養成し、国内外における様々な社会的課題・変化に応えられるような力を養成できるよう支援していきたいと考える。